

3 果樹の病害虫の発生生態と防除対策

果樹の病害虫の耕種的防除と防除上の注意

○ 果樹類

カメムシ類

耕種的防除

- ①袋かけを行う。ただし、果実が肥大し、袋に接すると加害されるため、薬剤防除が必要になる。
- ②常発園では、ネット(目合い4mm程度)で園全体を覆い侵入を防ぐ。
- ③黄色蛍光灯等を設置して成虫の侵入を防ぐ。

防除上の注意事項

- ①果樹園への飛来量は年次変動が大きいので、発生予察情報で多発が予想される年には特に被害防止に備える。
- ②カメムシの加害は、果実肥大期から成熟期まで続くので、成虫の飛来が認められれば直ちに防除する。

ヤガ類

耕種的防除

- ①ネット(目合い4mm程度)で園全体を覆い侵入を防ぐ。
- ②黄色蛍光灯等を設置して成虫の侵入を防ぐ。

カミキリムシ類

耕種的防除

- ①成虫を捕殺する。
- ②幼虫食入初期に針金で刺殺する。
- ③成虫の発生前に枯死樹を伐採し、適正に処分する。

カイガラムシ類・コナカイガラムシ類・ロウムシ類

耕種的防除

- ①剪定時に多発生枝を切り、園外へ持ち出し適正に処分する。
- ②ワイヤーブラシ等でこすり落とす。
- ③冬期に粗皮を削り取り処分する(コナカイガラムシ類)
- ④越冬のための樹皮下への移動が始まる9月頃までに大枝にバンド巻きを行い、冬期に取り外して適正に処分する(コナカイガラムシ類)

防除上の注意事項

- ①晴天が続く風のない日に冬期のマシン油乳剤を散布する(ただしロウムシ類等には効果が低い)
- ②マシン油以外の農薬による防除適期は、卵からふ化した幼虫がロウ物質で虫体を覆うまでの期間であり、卵期や成虫期には効果が低い。

アザミウマ類

耕種的防除

- ①園内、園周辺の除草に努める。
- ②光反射シートマルチの設置で被害軽減が図れる。
- ③茶、イヌマキ、サンゴジュ等はチャノキイロアザミウマの発生源となるので付近には植えない。

ハダニ類

耕種的防除

- ①園内、園周辺の除草に努める。
- ②新梢や果そう葉を間引き、薬剤がかかりやすくする。

防除上の注意事項

- ①冬期にマシン油乳剤を散布し、越冬密度を下げる。

○ かんきつ類

ウイルス病・ウィロイド病

耕種的防除

- ①育苗や高接ぎには、健全な母樹から採取した穂木を用いる。
- ②結果量の調節、有機質の補給などにより、樹勢の増強を図る。

かいよう病

耕種的防除

- ①防風垣、防風ネットの整備など、防風対策を行う。
- ②ほ場を定期的に見回り、発病した枝や葉を取り除く。
- ③夏秋梢はミカンハモグリガの被害が発生しやすく、本病の発生を助長するのでできるだけ除去する。
苗木・若木などで夏秋梢を残す場合にはミカンハモグリガの防除を徹底する。
- ④伝染源となる抵抗性の弱い品種を園内に混植しない。

防除上の注意事項

- ①薬剤防除は、発芽前、開花前、落花直後、6月下旬の予防散布が重要である。
- ②葉害防止のためコサイドなど銅水和剤には炭酸カルシウム水和剤(クレフノン)200倍を加用する。
- ③3月にICボルドー66Dを使用する場合、樹勢の弱い樹への散布や異常低温の予想される場合の散布は避ける。
- ④台風が来襲する場合には事前に薬剤散布を行う。
- ⑤温州みかんでは大津四号、青島等で発生しやすい。

そうか病

耕種的防除

- ①ほ場を定期的に見回り、発病した枝や葉を取り除く。
- ②適正な肥培管理を行う。

防除上の注意事項

発芽時(新梢が5mm～1cm程度)の防除を徹底する。

黒点病、そばかす病

耕種的防除

- ①適切な間伐、整枝剪定により樹冠内部への採光を図り、枯れ枝の発生を抑える。
- ②枯れ枝の除去を徹底し、伝染源を少なくする。また、園内の剪定枝が持ち出せない場合は、一カ所に剪定枝を集めてビニールシートで覆うか、チップパーでできるだけ細かく砕き、黒点病の伝染源とならないようにする。
- ③そばかす病の発生源となるエンドウを周囲に植えない。

防除上の注意事項

散布後、200mm以上の降雨があった場合、又は1か月以上経過した場合は再度防除する。

青かび病、緑かび病

耕種的防除

- ①園内で発病果を見つけた場合には、園外の持ち出し処分する。
- ②雨や露で果実が濡れているときには収穫をしない。
- ③収穫、運搬、選果時には果実の取り扱いを丁寧に行い、傷を付けないようにする。
- ④適正な貯蔵量とし、過湿にならないよう換気に注意する。
- ⑤貯蔵庫内の腐敗果の早期発見に努め、除去する。

ミカンハダニ

防除上の注意事項

- ①冬期又は春期のマシン油乳剤散布によって6月まで発生が抑えられるので必ず実施する。
- ②ミカンハダニの防除の目安は、寄生葉率30～40%以上、1葉当たり雌成虫数が0.5～1頭程度である。
- ③抵抗性の発達を防ぐため同一薬剤は原則として年1回の使用にとどめる(マシン油乳剤を除く)。
- ④ミカンバエ防除後に多発しやすいので注意する。

ミカンサビダニ

防除上の注意事項

- ①冬期にマシン油を散布する。
- ②シートマルチ栽培園で多発することがあるので注意する。
- ③前年に発生が認められた園では、梅雨入り前及び8月下旬に防除する。

ナシマルカイガラムシ(サンホーゼカイガラムシ)

耕種的防除

整枝、剪定により薬剤のかかりやすい樹形となるよう努める。

防除上の注意事項

防除適期は、6月上中旬(第1世代幼虫期)、8月上中旬(第2世代幼虫期)、越冬期である。年間3世代発生し、幼虫の発生最盛期は第1世代では6月上旬頃、第2世代では7月下旬頃、第3世代では9月下旬頃である。

ミカンナガタムシ

耕種的防除

- ①老熟幼虫が木質内部で越冬するため、被害の甚だしい樹は伐採、軽い樹では被害枝を切断し、3月中に処分する。
- ②深耕、有機物の補給等適切な肥培管理により樹勢を落とさないように心がける。
- ③乾燥時は敷わらや十分なかん水を行う。
- ④高接ぎ樹には日焼け防止対策を行う。
- ⑤樹勢を低下させるゴマダラカミキリ等の防除を徹底する。

ミカンバエ

耕種的防除

- ①発生源である放任園を伐採することが、発生を減少させるのに最も有効である。
- ②被害果(異常着色果、早期落下果実)は、ビニール袋に詰めるなど、適切な処理に努める。
- ③柑きつ園周辺の雑木を伐採するとともに、防風林を刈り込み、明るい園にする。

防除上の注意事項

7月中下旬に成虫防除、8月中下旬に卵・幼虫防除を必ず実施する。卵・幼虫防除では、薬剤の登録濃度に幅がある場合、濃い濃度で散布する。

○ 落葉果樹

シンクイムシ類・ハマキムシ類

耕種的防除

- ①心折れ枝は早期に剪除する。(シンクイムシ類)
- ②袋かけを行う。
- ③被害果は集めて適切に処分する。
- ④冬期に粗皮削りなどを行う。
- ⑤樹皮下に移動する9月下旬までに大枝にバンド巻きを行い、冬期に取り外して適正に処分する。

防除上の注意事項

面積がまとまっているところ(3ha以上)では、性フェロモン剤による防除が有効である。

コスカシバ

耕種的防除

- ①食入したところからヤニ、虫糞が出ているので見つけしだい捕殺する。
- ②適正な肥培管理を行い、樹勢を維持する。

防除上の注意事項

面積がまとまっているところ(3ha以上)では、性フェロモン剤(スカシバコン)による防除が有効である。

ハダニ類

耕種的防除

下草を適正に管理する。

防除上の注意事項

抵抗性の発達を防ぐため同一薬剤は原則として年1回の使用にとどめる(マシン油乳剤を除く)。

○ いちじく

疫病

耕種的防除

- ①敷ワラ、マルチを施し、病原菌の跳ね上がり伝染を防ぐ。
- ②発病部は速やかに除去し、園外に持ち出し処分する。
- ③園内の排水対策を行う。
- ④適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ⑤下枝の垂れ下がりを支柱などで補強する。

株枯病

耕種的防除

- ①無病地で健全な苗木を植栽する。挿し穂は未発生ほ場から採取する。
- ②被害株を抜き取り除去する。
- ③適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ④排水を良好にする。
- ⑤水田転換の可能な発病ほ場では、2～3年間水稻を栽培する。
- ⑥抵抗性台木を利用する。

黒かび病

耕種的防除

- ①敷ワラ、マルチを施す。
- ②発病果は集めて適正に処分する。

アザミウマ類

耕種的防除

果口が開く前に果口に不織布サージカルテープを貼付し、果実内への侵入を防止する。
※果樹類の項も参照のこと。

イチジクヒトリモドキ

耕種的防除

幼虫が葉裏に群生する発生初期に、寄生葉を取り除いて処分する。

○ かき

炭疽病

耕種的防除

- ①園内の通風、採光を良くする。
- ②せん定時や発病期に病枝、病果を取り除き、園外に持ち出し適正に処分する。

落葉病

耕種的防除

- ①落葉は翌年の伝染源になるので、園外に持ち出し適正に処分する。
- ②適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。

防除上の注意事項

5月中旬から7月中旬の防除を徹底する。

うどんこ病

耕種的防除

黒粒状の子のう殻が付着した枝及び落葉は、せん定除去し、園外に持ち出し処分する。

防除上の注意事項

西条は特に発病しやすいので、注意する。

灰色かび病

耕種的防除

- ①園地の排水をよくする。
- ②落花後、果実に付着した花弁はできるだけ除去する。
- ③適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。

ハマキムシ類

防除上の注意事項

6月下～7月中の防除の効果が高い。

カキノヘタムシガ(カキミガ)

耕種的防除

- ①新聞紙や肥料袋などを樹幹、大枝にきつくまきつけてバンド誘殺を行い春までに剥がして処分する。
- ②冬期に粗皮削りをする。

チャノキイロアザミウマ

防除上の注意事項

発生の著しい園では開花期から8月上旬までに2週間ごとに4～5回薬剤を散布する。

カキクダアザミウマ

耕種的防除

冬期に粗皮をはぎとり、潜伏している成虫と一緒に処分する。

防除上の注意事項

4月下旬～5月上旬に1～2回防除する。

カキサビダニ

耕種的防除

摘蕾をすると被害軽減が図られる。

防除上の注意事項

展葉終止期(5月上中旬)が防除適期である。

○ キウイフルーツ

花腐細菌病

耕種的防除

- ①採光、通風、排水を良くする。
- ②多肥、強せん定は避け、樹勢を安定させる。
- ③環状はく皮をする。ただし、乱用すると樹勢が衰えるので注意する。
- ④雨よけ栽培をする。

かいよう病

耕種的防除

- ①ハサミなどの器具は樹ごとに消毒する。
- ②感染樹は、発病部位の基部寄りから除去する(骨格枝、あるいは主幹側に強く切り戻し)を行う。
- ③主幹に樹液の漏出が認められる場合は、台木まで主幹の切り戻しを行う。
- ④除去及び切り戻しを行った際には、銅剤の散布及び癒合促進剤の塗布により感染を防止する。
- ⑤除去及び切り戻した枝葉は、園地内に埋設または焼却などの適切な方法により処分する。

果実軟腐病

耕種的防除

- ①日照不足、通風不良は発生を助長するので夏期せん定を行う。
- ②病原菌は果梗枝や枯枝で越冬するので、除去する。
- ③雨よけ栽培をする。

防除上の注意事項

幼果期～果実肥大期(6～7月)の防除を徹底する。

灰色かび病

耕種的防除

- ①採光、通風排水を良くする。
- ②花がらの除去を行う。

貯蔵病害(灰色かび病)

耕種的防除

- ①採光、通風排水を良くする。
- ②ぬれ果は収穫しない。
- ③収穫作業は丁寧に行い、傷をつけないようにする。
- ④貯蔵中に点検し、病果を取り除く。

キイロマイコガ

耕種的防除

果実同士が接触しあうと被害が多くなるので、果実が接触する前に摘果を終えるようにする。

防除上の注意事項

落弁期～幼果期に果梗部や果実同士の接触部に生息するので重点的に散布する。

○ くり

胴枯病

耕種的防除

- ①病枝は、り病部の30cm下から剪定・枝で取り除き適正に処分する。
- ②凍害は胴枯病の誘因になるので適正な肥培管理を行うとともに防寒対策を行う。

炭疽病(実炭疽病)

耕種的防除

クリタマバチの被害芽や枯枝が伝染源となるので、整枝・せん定で取り除き園外に持ち出し適正に処分する。

防除上の注意事項

防除適期は早生種(丹沢、国見等)で7月下旬、中生種(筑波、銀寄等)で8月上旬、晩生種(石鎚、岸根等)で8月下旬である。

クリシギゾウムシ

耕種的防除

落下果実は園外に持ち出し、処分する。

防除上の注意事項

薬剤散布は、中生種(筑波・銀寄等)、晩生種(石鎚・岸根等)を対象に収穫25日前頃に行う。

クリイガアブラムシ

耕種的防除

イガ等に卵越冬するので速やかに適正に処分する。

防除上の注意事項

防除は着穂直後から2～3回実施する。

クリタマバチ

耕種的防除

①間伐、整枝、剪定を適正に行い、樹勢の維持強化を図る。

②適正な肥培管理を行い、樹勢を維持する。

③天敵(チュウゴクオナガコバチ等)保護のため4月末まで剪定くずの処分はしない。
また3月下旬～5月までの薬剤散布は行わない。

④抵抗性品種を栽培する。

防除上の注意事項

防除時期は羽化脱出期(6月下旬～7月初旬)である。

キクイムシ類

耕種的防除

①適正な肥培管理を行い、樹勢を維持する。

②枯死樹は伐採し、処分する。

ネスジキノカワガ

耕種的防除

被害穂果を適正に処分する。

モモノゴマダラノメイガ

耕種的防除

①被害穂果を適正に処分する。

②主幹、主枝の樹皮の荒れている部分を削り取り越冬虫を捕殺する。

防除上の注意事項

防除時期は、早生種(丹沢・国見等)で8月上旬～8月中旬、中生種(筑波・銀寄等)で8月下旬～9月上旬、晩生種(石槌・岸根等)で9月上旬～9月中旬である。

クリミガ

耕種的防除

被害穂果を適正に処分する。

防除上の注意事項

防除時期は8～9月である。

コウモリガ

耕種的防除

①樹幹周囲の下草除草に努める。

②幼虫食入初期に針金で刺殺する。

③被害枝はなるべく早く切り取って処分する。

○ なし

白紋羽病

耕種的防除

①樹勢の維持に努める。

②未熟な粗大有機物の埋め込みは発生を助長するので投入しない。

胴枯病

耕種的防除

①樹勢の維持に努める。

②病枝は発病部の30cm下から切り取り、園外に持ち出し適正に処分する。

防除上の注意事項

発病部を大きめに削り取り、薬剤を塗布する。

山口県では、胴枯病に類似した枝枯病が発生している。耕種的防除は胴枯病に準じる。

黒斑病

耕種的防除

- ①萌芽期から開花までに、伝染源となる枝病斑の封じ込めとボケ芽の切り取りを十分に行い、春の伝染源を少なくする。
- ②小袋掛けは孢子飛散量が急増する5月下旬までに終える。
- ③ほ場を定期的に見回り、落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し処分する。
- ④耐病性の「ゴールド二十世紀」に更新する。

防除上の注意事項

- ①果実感染の最も重要な時期である開花期～小袋掛け期の防除を徹底する。
- ②梅雨期は発病蔓延期にあたるため、薬剤散布間隔を短くし防除を徹底する。
- ③盛夏期及び秋期(9～10月)にも発病が増加するため、定期的に薬剤散布を行う。
- ④耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。なお、ポリオキシシン剤の耐性菌が県下全域で発生しているため、銅剤と混用して使用する。

黒星病

耕種的防除

- ①発病枝や被害芽は切り取り、落葉は集めてほ場外に持ち出し、適正に処分する。
- ②適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ③通風対策、園内の草刈り等ほ場衛生に努める。

輪紋病

耕種的防除

- ①小袋をかける。
- ②樹幹上のいぼ病斑を削り取り、再感染を防ぐためにトップジンMペースト等を塗布する。
- ③いぼ病斑が多発生している枝は切り取り、園外に持ち出して適正に処分する。
- ④剪定枝は園の近くに放置せず、できるだけ早く処分する。

防除上の注意事項

いぼ状病斑が形成されてからの薬剤散布で治癒させるような薬剤はないので、予防散布を徹底する。

赤星病

耕種的防除

病原菌の孢子は風によりビャクシン類(カイヅカイブキ等)から2km以上も飛散するので、ビャクシン類を付近に植えないようにする。

防除上の注意事項

- ①耐性菌の出現を回避するため同一系統薬剤の輪用または連用しない。
- ②病原菌は雨によって侵入発病するので、必ず雨前散布を行う。

ナシヒメシンクイ

耕種的防除

- ①粗皮削りなどを行い、越冬量を少なくする。
- ②被害果を取り除き、適切に処分する。

防除上の注意事項

無袋栽培では7月頃から収穫期まで7～10日間隔で薬剤防除を行う。また、有袋栽培も含め、9月以降に収穫する品種では、8月下旬～9月の防除を重点的に行う。

ナシホソガ(ナシノカワモグリ)

耕種的防除

- ①幼虫態で枝の表皮下で越冬するため、冬期剪定時に被害枝をなるべく取り除く。
- ②徒長枝を出さないような整枝、剪定を行う。

防除上の注意事項

薬剤防除は、第1世代幼虫の食入を防止するため、越冬成虫発生最盛期(越冬世代7月上旬)を重点に行う。

チュウゴクナシキジラミ

耕種的防除

剪定枝や落葉は園外に持ち出し適切に処分する。

防除上の注意事項

- ①果そう部や葉に発生するすす病や、幼虫が尾部から排出する白色のろう状物を目安として、早期発見に努める。
- ②発生園では幼虫発生開始時の4月下旬～5月上旬と成幼虫の急増前の6月下旬～7月上旬に防除する。

○ ぶどう 黒とう病

耕種的防除

- ①雨よけ栽培を行う。
- ②越冬伝染源量を低くするため枝病斑や巻づるを除去し、園外に持ち出し適正に処分する。
- ③園内の通風を良くするため間伐する。
- ④適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。

褐斑病、さび病

耕種的防除

- ①適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ②落葉は集めて園外に持ち出し、適正に処分する。

灰色かび病

耕種的防除

- ①園内の通風・採光を良くする。
- ②花冠の残存は発病を助長するので除去に努める。

うどんこ病、べと病

耕種的防除

- ①園内の通風、採光を良くする。
- ②肥培管理を適正にし、樹勢を健全に保つ。
- ③落葉は集めて園外に持ち出し、適正に処分する。

防除上の注意事項

- ①銅水和剤(ICボルドーは除く)は葉害軽減のため、炭酸カルシウムを加用する。
- ②有機銅剤を用いた幼果期の防除は果房から噴口を70cm以上はなして散布する。2度がけをしない。
- ③マンゼブ・メタラキシル剤、オキサジキシル・マンゼブ剤は幼果期に散布すると果粉の溶脱や果実汚染を生じるので使用しない。

晩腐病

耕種的防除

- ①雨よけ栽培を行う。
- ②越冬伝染源量を低くするため枝病斑や巻づるを除去し、園外に持ち出し適正に処分する。
- ③袋かけはできるだけ早く行う。
- ④果実袋は雨滴が流入しないように、針金を止め口の上部まできつく締める。
- ⑤園内の通風、採光を良くする。

ブドウトリバ

耕種的防除

- ①発生初期に被害果を摘除する。
- ②果実に袋をかける。

ブドウスカシバ

耕種的防除

園内密度を下げるため、せん定枝等を適正に処分する。

クビアカスカシバ

耕種的防除

- ①被害を早期に見出しやすくするため、粗皮はぎを行う。
- ②7月～9月に、虫糞を目安にして樹皮下に食入した幼虫を捕殺する。

防除上の注意事項

- ①幼虫が発生し始める6月～7月に薬剤防除を行う。
- ②薬剤防除は、主幹や太枝に十分薬液がかかるように行う。

○ もも

縮葉病

耕種的防除

発病葉を除去し園外に持ち出し、適正に処分する。

黒星病

耕種的防除

- ①袋かけを行う。
- ②園内の通風、採光を良くする。

灰星病

耕種的防除

- ①摘花期の花腐れや発病果は必ず摘除し、適切に処分する。
- ②発病枝、せん定枝は園外に持ち出し処分する。
- ③袋かけを行う。
- ④園内の通風、採光を良くする。

フオモプシス腐敗病

耕種的防除

- ①せん定時に枯れ込んでいる枝はていねいに取り除き処分する。
- ②園内の通風、採光を良くする。
- ③発病果は園外に持ち出し処分する。

せん孔細菌病

耕種的防除

- ①本病は風雨を強くうけるところに激しく発病するので防風林や防風垣を整備し、できるだけ風当たりを少なくする。
- ②発病枝は除去し、園外に持ち出し処分する。
- ③袋かけを行う。

炭疽病

耕種的防除

- ①せん定時に枯れ込んでいる枝はていねいに取り除き処分する。
- ②摘果、袋かけ時に発病果を摘除する。

モモノゴマダラノメイガ

耕種的防除

- ①摘果終了後、なるべく早く袋かけを行う。

○ りんご

白紋羽病

耕種的防除

- ①適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ②土壌の物理性を良くするため、深耕し完熟堆肥を投入する。
- ③未熟堆肥を施用すると発病を助長することがあるので避ける。
- ④発病樹を発見したら、根を堀上げ、被害部を除去して薬剤処理をする。

紫紋羽病

耕種的防除

- ①適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ②深耕、完熟有機物の施用、堆肥マルチ、灌水により発病が軽減できる。

赤星病

耕種的防除

- ①適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ②病原菌の胞子は風によりビャクシン類(カイヅカイブキ等)から2km以上も飛散するので、ビャクシン類を付近に植えないようにする。

黒星病

耕種的防除

- ①最も重要な第1次伝染源は落葉なので、集めて適切に処分する。
- ②剪定枝は園の近くに放置せず、適切に処分する。
- ③適正な肥培管理を行い、樹勢を適正に保つ。
- ④通風対策、園内の草刈り等ほ場衛生に努める。

黒点病

耕種的防除

- ①被害果実、落葉は翌年の伝染源になるので、園外に持ち出し処分する。
- ②袋かけを行う。

斑点落葉病

耕種的防除

- ①落葉、枝病斑は伝染源になるので、園外に持ち出し処分する。
- ②剪定枝は園の近くに放置せず、適切に処分する。
- ③袋かけを行う。
- ④適正な肥培管理を行い樹勢を適正に保つ。
- ⑤園内の通風、排水対策を行う。

輪紋病

耕種的防除

- ①袋かけを行う。
- ②樹幹上のいぼ病斑を削り取り、再感染を防ぐためにトップジンMペースト等を塗布する。
- ③いぼ病斑が多発生している枝は切り取り、園外に持ち出して適正に処分する。
- ④剪定枝は園の近くに放置せず、できるだけ早く処分する。

防除上の注意事項

いぼ状病斑が形成されてからの薬剤散布で治癒させるような薬剤はないので、予防散布を徹底する。

うどんこ病

耕種的防除

越冬伝染源を少なくするため、被害枝の剪除を徹底する。

すす点病、すす斑病

耕種的防除

- ①園内の通風、排水対策を行う。
- ②すす斑病は発病初期であればふき取れば落ちるので、発見次第ふき取る。

褐斑病

耕種的防除

- ①落葉は翌年の伝染源になるので、園外に持ち出し処分する。
- ②園内の通風対策を行う。

炭疽病

耕種的防除

- ①被害果実、落葉は園外に持ち出し、適正に処分する。
- ②園内の通風対策を行う。

キンモンホソガ

耕種的防除

- ①台木のヒコバエは春期に産卵が集中するので産卵が終了する開花期から落花直後に切り取る。
- ②春期に落葉は集めて処分する。

○ うめ

黒星病、かいよう病

耕種的防除

冬期せん定時に病枝を除去し、園外に持ち出し適正に処分する。

灰色かび病

耕種的防除

園内の通風、採光をよくする。

○ すもも

ふくろみ病

耕種的防除

発病果は摘除し、適切に処分する。

黒斑病

耕種的防除

- ①防風対策をする。
- ②発病枝を除去し、園外に持ち出し処分する。
- ③肥培管理を適正にする。

○ びわ

がんしゅ病

耕種的防除

- ①無病苗を定植する。
- ②防風、防寒対策を行う。
- ③ナシヒメシンクイ、クワカミキリの食入を防ぐ。
- ④病斑の削り取りを行う。

防除上の注意事項

防除適期は、発芽直後、収穫後、芽かぎ後、せん定後の計4回である。

ごま色斑点病

耕種的防除

- ①はね上がりを防ぐため、敷きわらをする。
- ②防風、採光対策を行う。
- ③雨よけ栽培が有効である。

防除上の注意事項

- ①苗木に発生が多い。
- ②春葉・夏葉・秋葉の展葉～伸長期が防除適期である。

灰斑病

耕種的防除

- ①発病葉を除去し、処分する。
- ②園内の排水をよくする。

防除上の注意事項

新梢の出る前と伸長中の防除効果が高い。

白紋羽病

耕種的防除

- ①健全な苗を利用する。
- ②未熟な粗大有機物をほ場内に投入しない。

○ 茶

炭疽病

耕種的防除

- ①窒素質肥料の過用を避ける。
- ②チャ園の風通し、陽当りをよくする。
- ③凍霜害をうけると多発するので、凍霜害対策を徹底する。
- ④被害葉は除去し、適正に処分する。
- ⑤常発地では抵抗性品種を導入する。
- ⑥梅雨明け後、深整枝により発病葉を取り除く。

防除上の注意事項

- ①同一薬剤及び同一系統薬剤の連用は耐性菌が発生する恐れがあるので避ける。
- ②多発が予想される場合は1葉展開期とその数日後の2回散布が必要である。

網もち病

耕種的防除

- ①被害部は除去し、適正に処分する。
- ②常発地では抵抗性品種を導入する。

もち病

耕種的防除

- ①窒素肥料の過用は避ける。
- ②早期発見に努め、整枝により病葉を除去し適正に処分する。
- ③日照をさえるようなものはできるだけ少なくし、風通しをよくする。

輪斑病

耕種的防除

多発園では、深刈、中刈を行って被害枝葉を除去し適正に処分する。

防除上の注意事項

- ①病原菌の生育適温が25～30℃と高く、高温時に摘採・整枝した場合に発生が多くなるので注意する。
- ②主に、摘採による茎葉の切断傷部から侵入するので、摘採直後に薬剤散布することが望ましい。

チャノホソガ

耕種的防除

- ①被害葉は早めに摘採する。
- ②蛹で越冬するので蛹化前(三角巻葉期)に秋整枝を行う。

チャドクガ

耕種的防除

幼虫が分散する前に被害葉を除去し、適正に処分する。

ミドリヒメヨコバイ、チャノミドリヒメヨコバイ

耕種的防除

2、3番茶開葉期及び秋芽生育期を重点に防除する。

ツマグロアオカスミカメ

耕種的防除

セイタカアワダチソウ、アレチノギク等キク科の雑草を除去する。

ハダニ類

耕種的防除

- ①窒素質肥料の多用はしない。
- ②凍霜害の発生によりハダニの多発が起きることがあるので、凍霜害対策を徹底する。

防除上の注意事項

ダニは薬剤に対する抵抗性が発達しやすいので同一薬剤の連続使用は避ける。

クワシロカイガラムシ

耕種的防除

発生が多い園では一番茶摘採後に中切り更新して寄生部を除去し、樹勢回復を図る。

除去した枝は焼却・埋設する。

防除上の注意事項

枝梢に十分付着するよう散布する。中切り後には薬剤防除を行う。

チャトゲコナジラミ

耕種的防除

深刈りせん枝により、寄生葉を除去する。せん枝枝条は焼却・埋設する。

防除上の注意事項

- ①秋冬期の防除を徹底する。冬期はマシン油乳剤を必ず散布する。
- ②薬剤は十分量を散布する。すそ部から茶株頂上部へ向けて斜め上方に薬液を散布することで、防除効果が向上する。
- ③地域一斉防除が効果的。